岡崎城下二十七曲り
城下町と宿場町からなる
屈折の多い町並み

岡崎城郭図　「新編岡崎市史近世３」

豊臣側の田中吉政は、天正18年（1590）に岡崎城入城後、矢作川に初めて橋をかけ、菅生川の南にあった東海道を城下へ引き入れるなど、関東の徳川家康の西上に備え、城下の整備にとりかかりました。城下の道は、外敵には城までの距離を伸ばし、間道を利用して防御することができる屈折の多い道が常で、岡崎はその典型。しかし、徳川の安定政権が続くと防御の意味もなくなり、城下町・宿場町として栄えていきました。

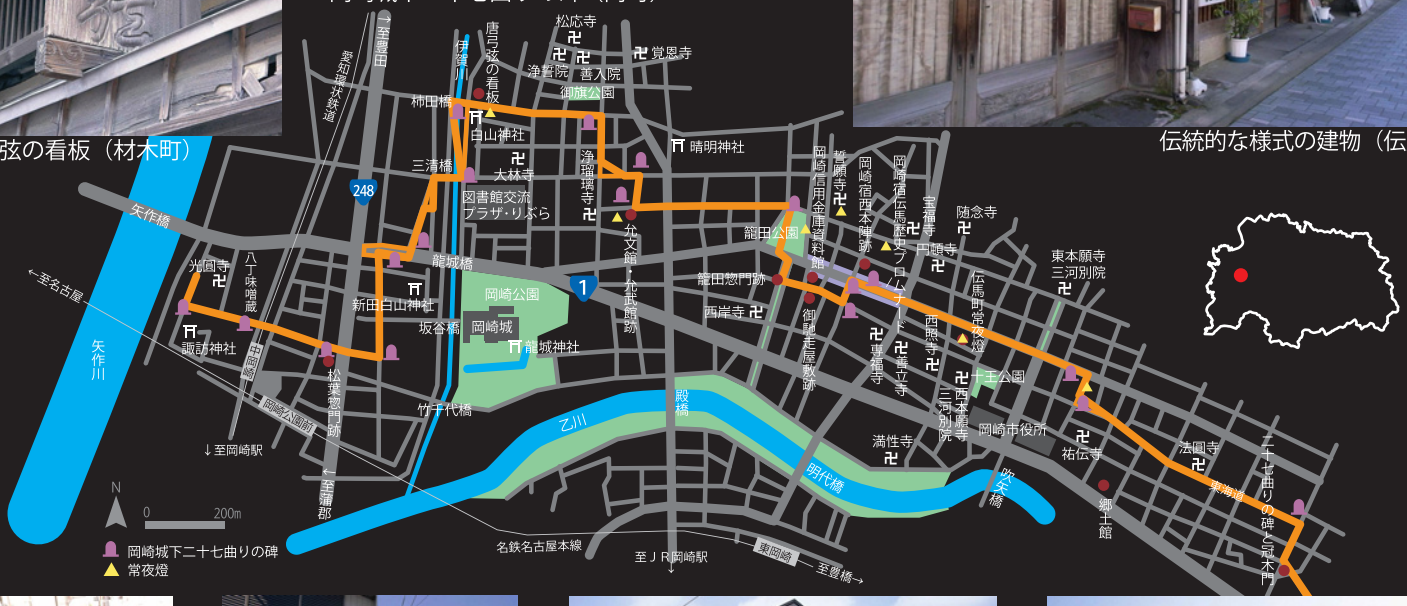
江戸時代、城下を通る東海道は、「岡崎の二十七曲り」と呼ばれ、屈折の多いその町並みの長さは有名で、本陣3軒、脇本陣も3軒あった岡崎宿は、東海道の中でも三番目に規模の大きい第38番目の宿場町であり、矢作川の水運や奥三河からの物資の集散地として繁栄しました。

太平洋戦争時の空襲により宿場の面影はほとんどありませんが、現在でも、街角の碑や道標、常夜燈、商家の看板などをたどって屈折の多い町並みを楽しむことができます。

唐弓弦の看板（材木町）

岡崎城下二十七曲りの碑（両町）

伝統的な様式の建物（伝馬通）



岡崎宿伝馬歴史プロムナード

常夜燈（伝馬通）

岡崎信用金庫資料館（旧商工会議所）（伝馬通）

岡崎城下二十七曲りの碑・冠木門（若宮町）